

(竹内) 機材センターの過去・現在・未来についてご意見をいただき、最後に激励のことばをいただくといい流れで、インタビューを進めさせていただきます。

まずは、機材センターのこれまでの活動に関する印象や思い出についてお話しいただければと思います。

(谷口) 私は87年入社ですが、90年に電気関係安全研修で初めて機材センターにお邪魔しました。その時に場内を見学しましたが、桝組足場を手でケレンした後、それを吊り下げて自動でスプレー塗装する機械がありました。それを見て、いろいろ機械化しているんだというのが、機材センターの最初の印象でした。

入社後は京都作業所に配属されていたので、機材センターとはタワークレーンと工事用エレベータの組解体の時しか関りがありませんでした。機材センターの方と初めて同じ作業所で仕事をしたのは、2004年の松下PDP3期作業所です。機械担当として機材センターのメンバーが作業所に配属となりました。それ以降も機材センターの方々と一緒に仕事をする機会を多くいただきました。皆さんに対しては、とにかく真面目で、仕事に誇りを持っているスペシャリスト軍団という印象です。

(竹内) 続きまして、今現在、機材センターに求められる役割として、3つの観点からお尋ねしたいと思います。一つ目は安全・品質・コンプライアンスについて、二つ目は生産性向上について、三つ目は技術の伝承についてです。

まず、安全・品質・コンプライアンスについてお尋ねします。

(谷口) 2017年に私が安全環境部長を拝命させていただいて、安全面で特に機械・電気に関しては機材センターと協業することがいかに大事かということを実感しています。安全環境部に機械・電気に詳しい人材が少ない中で、建設機械系社員である機材センターのメンバーが安全環境部に所属しているのは非常に強みになっているし、助かっているし、ありがたいと思っています。

2018年に機材センターに安全検査グループができました。「検査安全グループ」ではなくて、安全が前に来ているのが安全環境部としては非常に心強いです。機材センターの皆さんと一緒に働くことが、当社の安全確保に大きく寄与すると思っています。

作業所からは、様々な工事の支援を依頼されるでしょう。私は所長時代に免震工事の管理をお願いしました。さすが機材センターだなという形に、きちんとまとめていただきました。今後も、免震工事だけではなく杭工事や山留工事についても支援を求められると思いますが、品質確保については機材センターの皆さんが当社においてトップランナーだと思いますので、きちんとこれからも貢献していただきたいと思います。

(竹内) 次に、生産性向上について伺います。機材センターは、トラベリングやリフトアップといった特殊工事について汎用化を進めてきました。技術開発も活発にしております。これらの活動と同時に、竹中新生産システムの推進に機材センターとして如何に貢献する

か、フロントローディングや作業所の機械化施工支援に如何に取り組んでいくかが大きな課題と考えています。このような生産性向上に対する取組みについて、機材センターに求める事は何でしょうか。

(谷口) 建設作業員が減り、今後時間外労働の規制が掛かるということで、建設業を取り巻く環境がかなり変わり、生産性を向上しなければ、もう先に進めないという状況になっています。生産性向上の手段には様々なものがありますが、機械化が非常に大きな成果が上がるものだと思います。それに重点的に取り組むことができるのは機材センターなので、全社的に期待が非常に大きいと思います。建トウン等様々な開発機械がありますが、試作・施行を繰り返しながら汎用に繋げていく過程には時間と経費が大変掛かると思います。にもかかわらず、メーカーと今まで築いてきた信頼関係を元に、一緒に協議しながら成果を上げているのはやはりすごいなと。アイデアを出すのは簡単かも知れませんが、それを具現化するのは非常に大変なことだと思います。建トウンは、「高所作業車で上げて走ったら楽」という単にそれだけの着想ですが、それを実現するために様々な試行や失敗を繰り返してきたと思います。そういった活動が非常に素晴らしいです。以前開催された建設機械展示会の時に、タワークレーンを遠隔操作するという夢みたいな話をしてしているブースがあって、「5Gが広まったら実現できます」と言っていましたが、本当に今それを実現していますよね。本当にすごいと思います。遠隔操作であるにもかかわらず、ほとんどタイムラグがありません。こういったものが実現されると、会社の生産性向上にも繋がるし、作業員の方々の労働環境を良くすることに本当に繋がると思います。アップローについては、こういった機械を作っていただき、非常にありがたいです。未だに高所作業車で、ダクトや配管や鉄骨を揚重しています。なぜなら、法律では「用途外使用は不可、ただし作業員の安全が確保できるときはその限りではない」と謳っているので、平気でそれをやっています。しかし、必ずしも安全が確保できるわけではないので、効果的な代替方法を模索していましたが、アップローがその課題を解決してくれました。カーテンウォーカーやジラフも非常に良い働きをして、作業が大変楽になっています。生産性を非常に高めていると思います。機材センターは、様々な角度から生産性につながるアイデアを出して具現化しているので、「機械化施工の竹中工務店」と呼ばれるための礎を築いていただければと思っています。大変期待しています。安全環境部は年配の方が多く、いろいろ経験値が高く知識も深いので、こういった機械開発の過程でご相談いただけたら、より安全にするためのアドバイスやアイデア出しができると思います。是非声を掛けもらって、協力させていただきたいと思っています。

(竹内) 続いて、技術の伝承について伺います。技術の伝承は、どの部門においても苦勞されていると思います。機材センターは、大規模な山留杭工事や免震工事等に関して、作業所に代わって協力会社の指導・管理等を担い、その過程において脈々と技術の伝承及び

人材育成を図って参りました。同時に、作業所及び技術部に対して、指導・教育を行っております。このように、情報提供にとどまらず、計画から施工管理まで一貫して対応できることが機材センターの強みと考えて活動を続けてきました。このような技術の伝承、人材育成、そしてそれを活かす機材センターの取り組みについてご意見をいただきたいと思います。

(谷口) 機材センターは、製和会の皆さんと一緒に、社員だけでなく協力会社の方々も対象に様々な教育をしています。それはずっと続けていただきたいと思います。技術の伝承は非常に難しいと思いますが、機材センターの皆さんは専門性を活かした施工計画や管理がきちんとできることからわかるように、技術の伝承がしっかりとされており、それが当社の大きな強みとなっています。

近年、安全環境部に建設機械系の新社員が配属されることが定着しています。高卒が多いのですが、新総合として機材センターに入った時に、スペシャリスト軍団の皆さんが知識を与え、経験をさせて底上げしていくことが非常に大切だと思います。建設機械系の新社員がなぜ安全環境部に配属されるのかというと、2〜3年ほど前に新社員にローテーションに関して何が良かったかのアンケートを取った時、建設機械系の新社員は全員、「安全環境部に配属となったことが良かった」と書いてくれたらしく、以降、人事の方針になったと聞いています。安全環境部と機材センターは、切っても切れない関係です。安全環境部から機材センターの皆さんに、いろいろと情報提供できることがあると思うし、逆に我々も情報提供していただきたいことがたくさんあります。若手を育てるという技術の伝承の仕方もありますが、一緒に協業してお互いを高めあうことが、技術の伝承の仕方の一つでもあると思います。そういったことも一緒にやっていければと思いますので、お願いします。

(竹内) 続いて、将来への期待について伺います。未来の建築生産に関して、機材センターに求めること、思いなどがございましたら伺いたいと思います。

(谷口) 建設機械系の皆さんがイメージしている2030年の建築生産のイメージを見ると、私達が入社した時には空想の世界、アニメの世界という感じであった技術のいくつかが今、本当に実現されています。「朝起きたら既に勝手に足場ができている」といった技術もすごいと思いますが、危険な作業を機械がやるとか遠隔操作をすることによって労働環境を変えることは非常にいいことです。飛躍的に安全性も向上しますので、このイメージを具現化できるように、今後も進めていっていただきたいと思います。建設業はこれまで3K、即ち「危険・きつい・汚い」と言われてきましたが、今国交省や経団連が新3Kとって「給料・休日・希望」を謳っています。休みが増えてくる、給料が上がってくる、将来希望が持てると思うためには、機械化が具現化していかないと実現できません。活気ある建設業に業態に変えていくためにも、機材センターを含め全社で取り組んで、これを具現化していくことは非常に大切だと思います。開発初期の試作機は、うま

くいつているところだけを披露して、単なるデモンストレーションのように見えてしまいが、改良を幾度も繰り返していくことによって汎用化に至ります。その数を増やしていつて、良い業態に変えていくきっかけにしていなければなというふうに思います。

(竹内) お気に入りの開発機械はありますか。

(谷口) 御堂ビルで開催した「イケフェス大阪」で、「かもーん」と「ひもーん」に子供を乗せてあげたら喜んでいたとか。耐火被覆を集める機械も喜んでいたらしいですね。私は実際には使っていないので、それらの開発機械がどのように良かったのか検証はできていませんが、人間がやって大変なことを機械が代わりにやってくれることは非常にいいことだと思います。最近、作業所の職人さんたちも高齢化していますので。

(竹内) 安全環境部で安全に関する開発を何かされていますか？

(谷口) 技術部と共に、安全に関する DX の開発をしています。年内に試行版を出して、来年には本格活用したいと考えています。何でもかんでもデジタル化・機械化ではないですが、そうしたほうがよいものは必ずありますよね。特に安全環境部は、危険な作業は機械化して欲しいと一番に思いますので、安全環境部も一緒にやっていければと思います。

(竹内) 最後に、激励のおことばをいただきたいと思います。

(谷口) 安全・品質・コンプライアンスは、当社の経営の礎になっています。中嶋副社長が、いつもこのことをお話しされています。機材センターはその一翼をきっちり担っている部署であると思います。安全に関しては安全環境部と協業し、品質に関しては機械化施工で力を発揮し、当然コンプライアンスについてもきちんと対応しています。その中でも特に安全に関しては、機材センターと安全環境部はこれからも良い信頼関係のもと協業を続けていき、安全施工と機械化施工にしっかり取り組んでいくことが非常に大切だと思います。同じ 6 階のフロアで良きパートナーとして、情報交換も非常にスムーズにやっています。これは、お互いをリスペクトしていることによるものだと思うので、今後もいい関係を続けていければと思います。機械災害撲滅のためには、機材センター、協力会社の製和会、そして安全環境部が同じ方向を向いて取り組んでいくことが大切だと思いますので、今後もよろしくお願いします。

以 上